

Title

アマゾニアの子どもたちにとっての「遊び」としての生業

Name

大橋 麻里子

はじめに

私は、2008年からペルーアマゾニア先住民シビボ（Shipibo）の村で調査をしてきた。研究者としての調査対象は、村の人びとの生業、共食、そして森林の利用である（例：大橋 2014, 2021）。しかし、村に滞在するなかで学んだことは、こうした調査の目的そのもの以外にもたくさんあった。そのなかのひとつは「子どもはそこにいるだけで、まわりが元気になる、大事な存在」だということである。村の子どもたちはよく笑う。そして、大人も子どもたちの様子をみては笑う（叱ることの方が多いのだが…）。そうした姿から、私は「子どもというのが、その場にいるだけで愛おしい存在」であることを学んだ。

とはいえ、調査をしている際に、村の子どもを恨めしく思っていた時期もあった。たとえば、修士課程の学生で、修士論文執筆のためにデータを集めるのに必死だったときのことである。ある日私は、村で年配の女性に昔の様子について話を聞いていた。村の変容を追っている私にとっては大事なデータになる話だったが、そのとき、子どもが現れて悪ふざけをしたため、年配の女性が怒りはじめてしまった。一度話がそれると、なかなかテーマに話が戻らない。私は片言のシビボ語で必死に話を戻そうとしたことを覚えている。

修士論文を提出し終わった後は、子どもたちと一緒に私も子どもになりきって毎日を過ごした。シビボの子どもたちは自然のなかで遊ぶ術を教えてくれ、とにかくよく笑った。村への滞在が長くなるにつれて、村の大人が色々なことを話してくれるようになり、それはうれしい反面、複雑な人間関係に私自身が絡め取られていくように感じることもあった。そんなときは、子どもたちと過ごす方が気楽だった。そして、彼らから自然資源を使った「遊び」について教わるのは、実に楽しかった。本稿では、そうした経験をもとに、自然で「遊ぶ」名人の子どもたちにフォーカスして、ドス・デ・マジョ村での様子を記述することをこころみる。

本論に入る前に、「遊び」と「労働」の関係について、確認しておきたい。「遊び」の対極にあるものが「労働」であるとするならば、非西洋社会の「労働」について議論してきた経済人類学の議論にも少し触れておくべきであろう¹。西洋には、非西洋社会（「未開社会」）の人びとは食べる物がなく日頃から食べ物を探し回っている「貧困」であるとする、ステレオタイプとしてのイメージがあった。それに対して、リチャード・リーはアフリカのサン（Sun!）が狩猟において少ない労働時間で多くのカロリーを得ていることを指摘し、実は狩猟採集というのは非常に効率的な生業のあり方だということを示した（Lee 1968）。また本稿で取り上げるアマゾニアに住むシビボも、Bergan（1980）によって、少ない労働時間で多くのカロリーを主食のパナナから得ていると指摘がされている。つまり、「未開社会」の人びとは低い労働投下量で高いカロリーを得ていることが経済人類学者によって主張され

てきたのである²。

私自身も調査の過程で、可能な限り多くの人に納得してもらえるような論文を書きたいと思い、そのためにできるだけ数量化（グラフで示す）ことに努めてきた³。そのため、生態人類学という手法を主に用いて、データを収集するようにしてきた。

村で滞在しているとき、村人らを真似て、焼畑のための除草や収穫に参加してきたが、一時は、彼らの生業活動における労働投下量を明らかにするために、彼らの労働時間の計測を試みたときもある。しかし、その際にひとつ悩んだことがある。それは、現代社会においては「労働」と「遊び」を明確に分けることが当たり前であるが、この村の人びとの行動においては、それらを明確に分けることがむずかしいというものである。とりわけ子どもの行動は、大人以上に複雑である。通常、焼畑における労働投下量を計算する場合、子どもは大人の半分（1/2）とすることが多いが、本稿にて詳細を後述するように、シピボの子どもたちは親たちが収穫したバナナの運搬には参加するものの、それまでは別のことをしている。そうかと思えば、また別の日には親がする除草や収穫を結構な時間にわたり手伝っている。そうした様子を見て、子どもの行動を労働投下量という数値化することはむずかしいと私は考えるようになったのである。そして私は、彼らの生業への関わりが「労働」とも「遊び」ともいえる曖昧なものであり、そうした曖昧さこそが「シピボ社会の豊かさ」の要素のひとつなのではないかと考えるようになった。

本稿では、シピボの子どもたちの活動に注目し、調査を行う自分自身とのやりとりを中心に記述していくことで、彼らが行う「遊び」としての生業について考えていきたい。なお、自然資源に強く依存する社会における「子ども」に注目した先行研究に、亀井（2010）がある。亀井は、カメルーン熱帯林に住む狩猟採集民バカの子どもたちと共に行動をしながら、子どもたちが生業の技術そしてバカの社会において重視される食のシェアリングの規範を習得していく過程について明らかにした。本著は、これまで狩猟採集民の議論から捨象されてきた「子ども」という存在に注目することで、子どもが独自に行う狩猟についても明らかにするなど、バカ社会をより立体的に描くことに成功している。本稿でも亀井の視点にならい、「子ども」の行動に着目することで、シピボの生活を見直していくことにする。

本稿では3つの部分に分かれる。次の第1節では、研究対象地について、特にその地で暮らす子どもたちを取り巻く状況について、簡単に紹介する。続く第2節と第3節ではそれぞれ、彼らの主たる生業である漁撈と狩猟（第2節）、そして農耕（第3節）における「遊び」と「労働」の関係について考察し、「おわりに」では、これらの事例について分析し、シピボの子どもたちにとっての「遊び」の意味について、現時点での筆者の考えをまとめる。

1 村の子どもと「遊び」

1-1 「子ども」になるよう努める

対象地はペルー共和国（以下、ペルー）ウカヤリ州コロネルポルティエージョ県ドス・デ・マジヨ先住民コミュニティ（Comunidad Nativa de Dos de Mayo、以下、ドス・デ・マジヨ村）である。主な民族はシピボである。シピボの人口は、現在は3万人程度である。シピボはもともと好戦的な民族であり、魚を多く得られるウカヤリ川流域を占拠してきたとされる（Eakin et al. 1986）。ウカヤリ川はアマゾン川の源流のひとつであり、ペルーを南から北へと流れている。調査地となるシピボの集落はそのウカヤリ川上流域の支流に位置し、プカルパ市（Pucallpa）までは乗合船で20時間程度（川の水位が上がる雨季には、18時間程度）、さらに船外機付きのボートで約30分、

徒歩で約 15 分かかる（雨季であれば歩かずにボートで村にたどり着くことができる）。

村の人口は 100 名前後で推移している（2008 年から 2014 年まで）。主な生業は、漁労、農耕、狩猟採集である。村人は現金を得るために、トウモロコシ生産、木材伐採、出稼ぎも行っている。

日常的にもっとも多く消費する食事内容は、バナナ（*musa.spp*）を主食に、魚である。魚のかわりに野生動物の肉や、家畜のニワトリ（購入する場合もある）を食することもある。またコメやパスタを購入して消費することもある。

私は、シピボの村で村人宅に居候し、シピボ語を学びながら、居候先の焼畑や漁労などの生業に彼らと同じように参加するよう努め（彼らからみて、私がちゃんとできていたかどうかかわからないが）、彼らと共に生活をするなかで調査をさせてもらってきた。私は調査者としてというよりも、居候させてくれた家族の「子ども」のような形で、その場に居続けることを許してもらえるように努めた。居候先の奥さんのことを「ママ」と呼び、旦那さんのことを「パパ」と呼んでいた。居候先の奥さんは私よりも 1 歳年上なだけであり、彼女も、最初は私に「ママ」と呼ばれることについて笑っていたが、それでも他の娘たちと同じように私にも接してくれたと感じている。2010 年以降は、「ママ」の母親である祖母も他集落から移住してきて、一緒に住むようになった。

2008 年と 2009 年の滞在では、長女（当時 16 歳）が村での生活に不慣れな私を手伝ってくれた。だが、彼女が子どもを産み母親になったため、2010 年以降は、三女のモーシャ（7 歳、仮名）と一緒に行動することが多くなった。「ママ」の母親（つまりは祖母）もモーシャを「働き者」と評価して、モーシャのことを気に入っていた。モーシャは両親や祖母が焼畑は行くときには、必ずついて行った。そして、釣りが好きな子だった。

1-2 村の学校教育

子どもを取り巻く状況を説明するにあたって、学校教育に触れないわけにはいかない。ペルーアマゾニアの先住民社会でも、子どもたちは学校教育を受けることが求められている。

ドス・デ・マジヨ村には公立の小学校がひとつある。2012 年の時点で、村内の住居はすべて森から切り出した木材でできていたが、それに対し、小学校は村で唯一、コンクリート製の建物であった。教員は一名で、村出身の女性と結婚を機に移住してきた男性であった（2012 年当時）。それ以前は、単身赴任で来ていたシピボの男性が教鞭をとっていたが、彼は一度都市に戻ると村にはなかなか帰って来ないこともあった。教員が一人しかいないということもあり、授業をどの程度行うかはその教員の判断に委ねられている。授業はスペイン語で書かれた教科書を使いながら、シピボ語で進められていた。

小学校に行く日、村の子どもたちは朝 6 時には起きる。制服を持っている子は制服に、そうでない子も所持するなかで汚れや破れの少ない服に着替えてから、小学校に向かう⁴。どの家からも徒歩 3 分以内で、学校に着く。7 時には生徒が集合し、校庭に出て整列する練習をするほか、ペルー国歌を歌う。その後、教室に戻って授業を受ける。

私の居候先の子どもたちは、朝一番に準備される、熟したバナナを煮込んだジュースを飲み終わると学校へ行っていた。6 時過ぎから朝食の準備が始まるが、刺し網を取りに行き魚を回収し、調理が終わる前には、子どもたちは学校に行く時間となってしまうため、朝食を食べていると始業に間に合わない。子どもたちは 1 時間目終了後の休み時間に自宅に戻り、朝ごはんを食べていた。授業は午前中で終わるので、その後は家で宿題をしたり、親の仕事（焼畑に行く場合には焼畑に）一緒について行ったり、自分たちで魚を取りに行くなどして過ごす。

なお小学校を卒業後は中等高等学校に進むが、この村にはないため、近隣にあるシャララ村（Comunidad Nativa de Sharara）まで行かなければならない。シャララ村には、雨季であれば丸木舟で約 50 分、乾季であれば

徒歩で約1時間（もしくは徒歩15分＋丸木舟で30分）はかかる。ドス・デ・マジヨ村からシャララ村まで毎日通うのはそれなりに大変なのである。また、シャララ村は他民族のコッカーマ（cocama）が主要な民族であり、集落の規模が大きく混血化も進んでいるため、村内の日常的な会話はすべてスペイン語で行われているなど、ドス・デ・マジヨ村とは大きな違いがある。私の居候先の長女はシャララ村のそうした環境に馴染めず、卒業する前にやめてしまったという。（またそれ以外にも、年頃の女の子にとってのさまざまな悩みや出来事があったと思われる。）通い続けることができた子どもはみな、シャララ村で空き家を借りたり居候をしたりしながら通学していた。この村に住みながら、中高等学校教育を終えるのはそう簡単なことではない。

1-3 大人の「遊び」のサッカー

シピボ語には、日本語の「遊び」や英語の「play」に該当する言葉はない。「チンニ chinni」という言葉があるが、これは日本語でいうところの「ふざけて（いる）」の意味に近い。「チンニ」は、ふざけている子どもを「ふざけるんじゃない（チンニヤマウ）」と叱ったり、反対に大人が「ふざけたい（チンニカセイ）」と冗談を言ったりするときを使う。その他、不特定の異性と交流を持つ人物を「遊び人（チンニ）」と評する言葉であり、基本的にはネガティブな文脈で登場する。

子どもの「遊び」は実に多様である。本稿で、後述するような生業に関連する「遊び」以外にも、川で洗濯をしながらそのまま沐浴をして潜ったり泳いだりということもする。その他、サッカーやバレーボールといったスポーツも村で普及している。ただし、これらのスポーツを楽しむのは、子どもというより12・13歳以上の青年男女であり、夕方の沐浴前に汗を流す活動として行う⁵。先住民コミュニティ（行政村）になってからは、スポーツ振興員という役職が定められるようになった。その係になった人物は村内放送で「今からサッカー（バレー）をやります。みなさん集まってください」と声をかける。

こうした球技の中でもサッカーは特に人気があり、幅広い年齢層に普及している。子ども（小学生）だけであることもあるし、成人男女であれば近隣の先住民コミュニティとの対抗戦も行われている。また、ウカヤリ州の先住民コミュニティを対象とした大規模サッカーイベントが年に一度行われる。たとえば、2012年2月に開催されたイベントには、村で船外機付きのボートを一艘準備して、希望者が乗り込み、丸1日かけて会場が設置されたプカルパ市近くまで移動した。往復のガソリンの調達方法についても、村の集会で何度か話し合われていた（この時は、同時期に村の共有地で伐採をしていた企業に依頼していた）。このように、サッカーは日常的にも大きなイベントとしても、シピボの大人が楽しむ「遊び」として親しまれている。

2 漁労と狩猟にみる「遊び」

2-1 魚の重要性とさまざまな漁法

シピボにとって、魚は欠かせない食材である。シピボ語で食事を「ピティ（piti）」と言い、魚は「ヤパ（yapa）」と言われるが、この村では魚が「ピティ」と呼ばれている。彼らにとっては「食事といえば魚である」と言っても過言ではない。食事の際には、魚の代わりに野生動物の肉や家畜であるニワトリの肉が用意されることもあるが、「河と共に生きている」彼らにとって、魚はもっとも身近で大事なタンパク源である。



図1 刺し網に魚がかかっていないかを確認する村人

本節では子どもたちが日常的に行う釣りの様子、そしてチントと呼ばれる狩猟について見ていくが、それに先立ち、シビポにとっての魚の重要性と漁法について説明しておきたい。

「漁／猟がうまい」＝「ムチャ (muchá)」であることは、男性に対する褒め言葉である。村人の話によると、1980年代くらいまでは漁がうまく大きな魚を仕留めてくる男性に対しては、自分の娘を嫁としてもらってほしいか、と親の方から頼んだという（ただし、その人物がケチでなければ、という条件付きで：彼らにとって気前のよさは重要な美徳である）

彼らは狙う魚や出漁する場所によって漁法や使う道具を使い分ける。漁はまた、河の水位に影響されるため、雨季と乾季では、用いられる漁法も、そして獲得量も、大きく変わる。具体的な漁法としては、釣り、弓、ヤス、魚毒を用いた漁があるが、年間通じて日課のように行われるのは、刺し網を用いた漁である。この刺し網は、他の人が勝手に魚を持っていってしまうといったことがなければ、大抵何がしかの魚を得ることができる（図1）。

刺し網を仕掛けに行くのは男性あるいは男児であることが多い。私の居候世帯の長男（当時12歳）は、毎朝夜明けとともに、父親に「網を取りに行ってくい」と声をかけられていた。長男はしぶしぶと蚊帳の外に出て、洗面器（直径40センチほど）を片手に、三日月湖や支流に仕掛けてある刺し網を回収しに行っていたが、それが連日続くと、不貞寝をして父の言いつけに従わないこともあった。

刺し網漁はこうして、毎日のように仕掛けることが求められるため、日常的な義務であり、「楽しみ」があるとは言いがたいといえる。だが、それ以外の道具で行われる漁労は「楽しみ」をともなっているとっていいだろう。村のなかでもっともよく見られる生業における「遊び」といえば「釣り」である。学校に登校する日もしない日も、子どもたちは釣りに出かける。以下では、調査中のある日の釣りの様子を示していきたい。

2-2 釣りの事例

2009年7月8日、居候先のモーシャと次男であるマナコ（5歳、仮名）その従兄弟であるウィリン（9歳、仮名）が三日月湖へ釣りに行くといって、自宅周辺の土を掘り返していたので、私も一緒に行きたいとお願いをした。土を掘っていたのは、ミミズを餌として用いるためであった。



図2 三日月湖の淵で釣りする子どもたち



図3 手間の籠：我々三人が得た魚、奥：ウィリンの分、植物の蔓に通してある

一人一人が1本の釣り竿を持つ。釣り竿は木の枝と釣り針(村の売店で購入可)とを、糸(1.5メートル程度)で結ぶ。針金がなければ、針金を短く切って先を尖らせ、釣り針の形にする(返しは作らない)。竿に適した木の枝がなければ、家の屋根を吹いているヤシの葉の葉身を使って作る。

竿を手渡されて、私は返しのついていない釣り針でうまく釣れるか不安に思った。自分でも釣りをする読者には自明であろうが、釣りにおいては魚を狙うポイントが重要になる。訪れた先の三日月湖でのポイントは、木の枝が水面に迫り出し、少し日がかかる場所であった。私たちはそのような場所で釣りを始めた(図2)。

私にはほとんどわからないが、彼らは水面を見ればどこに魚がいるかわかるようで、そのポイントを狙って糸を垂らしていた。子どもたちは次々に釣り上げて行く。そうした姿を見ていると、ここでの魚釣りはいとも簡単そうに見えるが、私がやると、魚がかかっても返しのない釣り針ではすぐに逃げられてしまった。かかった瞬間に針が魚に食い込むようぐっと竿を手前に引くのだと、子どもたちの指導を受けるが、頭で理解できても実際にそう簡単にできるものではない。

釣れる魚の多くは、シピボ語でクシュ(kexe、学名不明)と呼び、市場で並んでいるのを私は見たことがない種類だった。背ビレのトゲが鋭く、魚を針からははずす際に、それが手に刺さると出血しかなり痛いので、モーシャは持ってきた山刀で魚の頭を叩いて気絶させてから、針からははずしていた。彼らはどこに行くにも大抵、山刀を持ち歩くが、これがさまざまところで役に立つ。

私がなかなか魚を釣れないでいたときに、ウィリンが「アシュンバ(Ashunba)」=「手伝おうか」と言い、私の釣り竿を取り上げて魚を釣り上げ、魚をつけたままの竿を戻してくれた。当時、食のシェアリングについて調査をしていた私は、シピボの人びとの所有概念や分配の仕方について考えていたため、このウィリンの行動は実に参考になった。だれが獲ったかということは、釣りにおいてはだれの竿にかかったのかということがわかったからである。

子どもたちは少しずつ移動しながらポイントを変えて次々に釣っていく⁶。釣りをしながら「マリ(私のこと)、シューシャマ ピヌン(xe shama pinen)」=「マリ、この魚の揚げたのを食べよう」と声をかけてくれた(この魚は揚げて食べるのが一番うまいとされている)。どうやら魚が全然釣れない私が退屈そうに見えたらしく、声をかけてくれたのである。こうして「今、していることのゴール」として、「〇〇、食べようね。」と話しかけてもらったことは、私がこれまでに参加をしてきた焼畑の作業中にもよくあった。行動を共にする私が飽きたり疲れしたりし

ている様子を察して、励ます言葉を投げかけてくれるのである。

集落を出発したのは7時半ごろであったが、10時をすぎた頃、私以外のみなも釣りに飽きてきたようで、付近にあったボートに乗って遊び始めたことで釣りは終わった。モーシャとマナコと私は同じ家に住んでおり一緒に食べるため、3人が釣った魚はまとめてひとつの籠に入れられた（図3）。

釣りを終わせるタイミングもその時々で異なる。別の日にモーシャと釣りに行ったときには、「何匹釣ったら、終わりにしよう」とモーシャが目標とする数を決め、それに到達するまでふたりでがんばって続けたことがあった（私はほとんど役立たず）。また、居候先の長女と釣りに行ったときには、彼女が「お腹が空いたから、帰ろう」と口にしたことで釣りは終わった。

本項の最後に、釣りとは何かを考えてみたい。釣りの楽しみあるいは刺し網漁との違いとして、獲物がかかったときに道具を通して伝わってくる獲物の動きが感じられ、獲物を仕留めたことの実感が得られることが挙げられる。私自身も刺し網にかかった魚を取りはずしたことがあるが、かかってから時間が経った魚はすでに死んでいることが多い。またかかった魚が生きていたとしても、複雑に網に絡まっている魚をはずすのは、達成感を得られるというよりむしろ面倒な作業であると感じた。釣りで得られるような「仕留めた」という感覚を、刺し網で得るのはむずかしいだろう。また弓矢漁は特定の魚を得る場合に行われるが、弓矢漁と釣りの共通点として、個人の技能が魚の獲得に大きく反映することが挙げられる。刺し網の場合、腕の良し悪しはあまり結果に反映されない。そうしたこともまた、釣りや弓矢で魚が獲れたときに、「うまかった」という感覚につながるのではないかと思われる。

2-3 子どもが行う狩猟、チント



図4 リクガメとアルマジロに喜ぶ



図5 弓を使えるようになることは一人前の証



図6 製作中のチント

子どもの行う生業的遊びである狩猟についても言及しておきたい。狩猟そのものは、2012年の時点で、村では銃を持つ男性が1名、そして、罟の一種であるトラバサミを持っている男性が1名、そしてその両方を持つ男性が1名いる。基本的にはこうした道具がないと動物を仕留めることはむずかしいが、森を歩いていて、ローランドパカ（*Cuniculus paca*）を見つければ、村人は山刀を片手においかけ巣のなかに入ったところを仕留めるし、リクガメ（*Chelonoidis denticulata*）やアルマジロ（*Dasyus novemcinctus*）であれば、狩猟の道具がなくても生きてまま素手で捕まえることができる（図4）。

銃や既製品の罟がなくても、自作した弓と矢を用いる場合もある。主として魚を取るときに用いられる弓矢の場合は、購入品の釘の先を四つ叉に加工してやじりとし、矢の先端につけることで、矢がしっかり魚に刺さるように

する（図5）。

弓矢のなかでも、子どもが使うものといえば、「チント（chinto）」である。チントとは、先端部分を削って尖らせて作る矢のことで、主には子どもたち（とくに男児）が「遊び」として狩猟をする際に用いるものである。万が一、人に当たったとしても、よほどのことがなければ怪我をさせることはない。大人がチントは用いることは少ないが、チントは周辺の樹木から切り出した材で作れることから、チントを使って弓矢猟（漁）を楽しむ大人もいる（図6）。なおチントは、シピボ語だけではなくスペイン語でも同様にチントと呼ばれている。

チントでは、小型の鳥やリスなどを狙って仕留める。弓矢猟で得られる動物は、そもそも体の小さい鳥や動物であるため、家族との食事の時間まで待たずに、子どもたち（だけ）で調理して食べてしまうこともある。また矢があたっても、動物が気を失うだけの場合もある。チントに限ったことではないが、狩猟で得られた動物が生きている場合は、すぐに食用とせずペットとして飼うこともある。

チントを使った弓矢猟で獲物を仕留める感覚を身につけていった子どもたちは、将来的に銃を使って動物を仕留めるようになっていく。つまり、彼らが行う「遊び」としての狩猟は、大きな獲物を取るためのトレーニングという意味合いもあるのである。

3 「働き者」の定義と農耕における「遊び」

3-1 農耕をしなければ「働き者」ではない？

漁労と狩猟とならんで、シピボにとって重要な生業がバナナ生産を中心とする農耕である。ここでは農耕における子どもたちの行動について記述していく。

私はこれまでに食材の生産（獲得）やその分配をとおして、人びとの間で社会関係を左右する概念である「働き者（raya）」や「ケチ（yoashi）」めぐって、人びとがどういった探り合いややりとりをしているのかを明らかにしてきた（Ohashi 2015）。村のなかでは、前節での冒頭で述べたように、漁と猟の腕は、娘を嫁にやってもいいと思わせるくらい、人をみるにあたって重視されるが、「働き者」であることもそれと同様に、重要な美德とされている。

シピボの人びとにとって、「働き者」というのがどういう意味なのか。調査をしながらそれについて考えていたときに、こんな出来事があった。ある世帯に刺し網をよく仕掛けに行き（回収も含む）、毎日のように魚を多く獲ってくる男の子（当時12歳）がいた。彼の母親に対して、「彼は働き者だね」と言ったところ、母親はそれに対して「漁だけね」と笑って答えたのである。確かに彼は毎日漁に勤しんでいるが、少なくともその当時において、焼畑に行ってバナナを担いで帰ってくる姿を見たことはほとんどなかった。村では、バナナという主食を得るために働くということが、「働き者」と呼ばれるためかどうかの分かれ目なのである（Ohashi et al. 2011）。以下では、シピボの子どもたちが農耕（収穫時）にどのように参加しているのかを見ていきたい。

3-2 畑で収穫、そのまま「食べる」

シピボ語の挨拶は、「どこに行くの？（Jae ne kai）」と尋ねることから始まる。それに対して、焼畑に行くときには、「バナナを取りに行く（Paranta bi kai）」と答え、魚を獲り（とり）に行くときであれば、「刺し網を仕掛けに行く



図7 収穫に来た家族、焼畑の入口に到着

(Trampa aki kai)」、「釣りに行く (Mishiki kai)」ほかにも「クシュ (前出、魚の種類) を、弓を使って取りに行く (Kexe tsuakai kai)」などと答える。一方、「狩猟に行く」というのは「ユームライカイ (Yomurai kai)」と言い、それは、家にはおらずに、森を歩いたり川を丸木舟で移動したりしながら、食材となる動物を探すことを意味する。

こうして日常的な挨拶では、「今から何をするのか」が明確に会話で示されるが、実際には、目的となる行動以外のことも多くしている。たとえば、焼畑に行く場合も、「バナナを取りに行く」だけではなく、焼畑への往復の道のりにおいて、そして、焼畑にいる間にさまざまなことをする。とりわけ子どもの行動は「遊び」の連続である。

私の居候世帯が所有する焼畑は、住居からそれなりに遠い。住居から焼畑までを水路で行くことのできる雨季であっても、丸木舟で30分はかかる場所にあった。乾季だと徒歩30分+丸木舟15分になる(2012年当時)。焼畑からは数日分のバナナを収穫してくるため、村所有のボート(4メートル程度)が使えるようであればそれを使うが、大抵の場合は、2人乗りあるいは4人乗りの小型の丸木舟にいくつか分かれて行くことになる(図7)。

子どもたちは釣りをしながら行き、親とは別に焼畑へは遅れて到着するということがあった。焼畑までの道のりで鳥の巣を見つけると、卵が入っていないか確認をする(見つければ、調理して食べる)。焼畑に到着すると、大人たちはバナナを収穫する前の下準備として、収穫する房が草に埋もれてしまわぬように株の周りを除草する。その間、祖母がバナナの葉を山刀で切り、座れる場所を作ってくれる。子どもたちは焼畑のなかに植わっているパパイヤ (*Carica papaya*) を収穫しに行き、その場で食べ、私にも分けた分をくれる。他にもパイナップル (*Ananas comosus*) やサトウキビ (*Saccharum officinarum*) も植えられている(他の人が勝手に持って行かないように、二次林化している焼畑のなかの、一見しただけではわからない場所に植えてある)。パイナップルやサトウキビは家族全員が食べるために集落に持ち帰ることが多いが、パパイヤは一度に多く収穫できるため、まずはその場で切り分けて収穫に来たメンバーで食べ、焼畑に来なかった家族の分だけを持ち帰る(これには、パパイヤが前者ふたつに比べて皮が薄く、運搬には不向きという作物的特徴があることも関係しているかもしれない)。

集落内にも果物になる植物は植えられているが、その多くは樹高の高い果樹である。上で記したパパイヤなどは、他の家の子どもが勝手に収穫して食べることがないよう、焼畑に植えられているのである。焼畑に行くという行動には、主食作物を収穫するという本来の目的に加えて、焼畑に行かないとありつけない甘い果実を食べられるという「楽しみ」があるのだ。

親もそれがわかっているので、焼畑に行くにあたり、子どもに「プーチャククノン (Pucha cucunon)」=「パパイヤを食べようね」と声をかけることがある。雨季はともかく乾季は、焼畑まで結構な距離を歩かなければなら

ないため、焼畑から作物を自宅まで運ぶにあたり、人手が多いに越したことはないため、このような言い方で子どもを収穫に誘うのである。

子どもたちは、帰りのバナナの運搬には否応なく参加しなければならないが、それまでの間は果実を食べたり、ときには近くの支流で釣りをしたりしている。また、家族みなが朝食をとっていないときには、畑に鍋を持って行って、その場で釣れた魚を調理してご飯を食べることもあった。

前出の漁労や狩猟はそのこと自体が「楽しみ」でもある一方で、農耕の場合は「労働」と「遊び」はより明確に分かれているといえる。とはいえ、バナナの運搬という「労働」を行う待機時間においても、ドス・デ・マジヨ村の子どもたちは、果物を食べるなど、さまざまな「遊び」の要素を取り入れているのである。

おわりに 「遊び」としての生業

本稿では、私がこれまでに調査をしてきたペルーアマゾン先住民・シピボの子どもたちが、どのように生業に関わっているかについて、漁労（釣り）、狩猟（弓矢猟）、農耕の3つをめぐる行動を明らかにした。釣りと狩猟の場でも、農耕の場でも、子どもたち「遊び」の要素を楽しみつつ、こうした生業が行われる場に参加しており、特に釣りや狩猟については、将来に向けてのトレーニングとしても重要であることを指摘した。

なお、釣りと狩猟については、それ自体が「楽しみ」であると同時に、彼らがとってきた魚や肉が、家族全体にとって大事な食料となっていることも指摘しておきたい。彼らが魚をとっているウカヤリ川においては、1980年代以降、大規模な商業的漁業が盛んになった影響で漁獲量が減っているが、それに加えて、村に導入されている森林開発のプロジェクトの仕事に大人が駆り出され、漁に出られない日もあったりする。そのような場合には、子どもが釣ってきた魚が重宝される。また狩猟に関しても、獲物が少量の場合は子どもたちだけで食べてしまう場合もあると述べたが、ちょうどそれが家族の食事の時間にあたる場合は、その獲物を少量でも家族で分けあって食べる。つまり、子どもたちによる釣りや弓矢猟は、食資源の減少や現金獲得活動に従事することが求められるようになった近年においては、それぞれの家族にとって食資源の獲得という意味でも大事な活動となっているのである。

本稿で取り上げたような、シピボの人びとは自然を利用しつつ、そこから食べ物を得て生活をしている。しかし一方で、現金経済の影響を受けており、工業製品の洋服を着ることも当たり前となっている（そもそもシピボはアマゾニアのなかでもファッションにうるさい人たちである）。さらにいえば、出稼ぎに出て獲得した現金のおかげで、携帯電話もそれぞれの人が持つようになっており、都市生活の影響は確実に強まっていた。しかし、そうしたなかでもシピボの子どもたちは、少なくとも村にいる際には、本稿で示したような「遊び」を日々繰り返すなかで、自然資源を駆使しながら生活基盤となる、食べ物の獲得や生産における技術を、着実に習得しているのである。それらの技術はまた、周囲に一人前として認められるために習得すべき技術でもあり、それと同時に得られた資源を他者とともに食べるか、などの社会的規範も学んでいるのである。

エピローグ

本稿の執筆の過程で、調査をしていた頃のさまざまな記憶がよみがえってきた。当時は村の「子ども」として認められてうれしい反面、居候先の祖母やママから「あれして、これして」と実際の子どものように扱われるよ

うになり、本音を言えば、そのような扱いを不満に感じた時期もあった。だが、それは全くもって贅沢な悩みであり、今思えばありがたいことである。彼女たちに、そしてたくさん行動をともにしてくれたモーシャに、とても感謝している。

「子どもはそこにいてだけで、まわりが元気になる、大事な存在」というのは、私自身、村の滞在を通して学んだことであるが、私自身が母となってからはこのことをより一層強く感じるようになった。私は三人兄妹の末っ子で、妹か弟が欲しかったこともあり、小さい子と接することが好きだった。しかし、成長するにつれて、自分よりも下の年代と接する機会は減っていった。そうして大人になり、初めて会う子どもとはどう接していいのかわからなくなっていた。これは私に限らず、今の日本が抱える社会的な問題のひとつであるのかもしれない。東京都内で電車に乗れば、まるで子どもを連れていることが罪であるような対応をされることもあるし、夫も特急列車のなかで子どもが騒いでいての舌打ちをされ、「大好きな電車に乗って興奮しているので、ある程度騒ぐのは仕方ないと思います」とつぶやいたら、険悪な雰囲気になった経験があるという。もちろんそうした嫌な経験だけではなく、隣に座った女性にぬいぐるみもらったこともあれば、長男を連れて大阪に行ったときには、同じく電車のなかで、見ず知らずの女性が「かわいい」と言いながら息子を抱っこしてくれて、驚きながらも大変うれしく感じたこともある。「子どもをかわいいと思う」気持ちの有無もそうだが、それをどこまで表立って表現してよいものかについては、地域差もあるのかもしれない。

子どもとの関係はもちろんだが、日本の人びとがもっと「豊か」に過ごすためのヒントをアマゾニアの先住民社会は与えてくれる。今後も生涯を通じて、可能な限り村の人びとの顔を見に行ければと思っている。

ところで、モーシャはどうしているのだろうか。互いに自分の子どもを連れて一緒に釣りにでかける日が来ることを心待ちにしている。

参考文献

- Bergman, Roland W. (1980). *Amazon Economics: The Simplicity of Shipibo Indian Wealth*. Department of Geography, Syracuse University: University Microfilms International.
- Eakin, Lucille, Erwin Lauriault, and Harry Boonstra. (1986). *People of the Ucayali: The Shipibo and Conibo of Peru*. Dallas, TX: International Museum of Cultures.
- Lee, Richard B. and Irvine Devore eds., (1968). *Man the Hunter: The First Intensive Survey of Single, Crucial Stage of Human Development-Man's Once Universal hunting Way of Life*. New York: Routledge.
- Ohashi, Mariko, Toshio Meguro, Motomu Tanaka, Makoto Inoue. (2011) "Current Banana Distribution in Peruvian Amazon Basin, with Attention to the Notion of 'Aquinquin' in Shipibo Society". *Tropics* Vol. 20, pp.25-40.
- Ohashi, Mariko. (2015) "Whom to Share With? Dynamics to the Food Sharing System of the Shipibo in the Peruvian Amazon," in Motomu Tanaka and Makoto Inoue eds., *Collaborative Governance of Forest Toward Sustainable Forest Resource Utilization*. The University of Tokyo Press.
- 大橋麻里子 (2013) 「アマゾン氾濫原におけるバナナの自給的栽培－ペルー先住民シビボの事例から」『生き物文化誌学会ピオストーリー』Vol.19 85-94
- 大橋麻里子 (2014) 「アマゾンの村で飲み食い－フィールドワーカーは村人になれるのか」佐藤靖明・村尾るみこ編著『フィールドワークの衣食住〈百万人のフィールドワーカーシリーズ 11〉』古今書院 2-28
- 大橋麻里子 (2021) 「揺らぐ食のわかちあい－ペルーアマゾン、シビボの森林利用から」柳澤雅之 阿部健一 (編)『ノーライフ・ノーフォレスト：熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』京都大学出版会 67-93
- カイヨワ・ロジェ (1970)『遊びと人間』清水幾太郎・霧生和夫訳 岩波書店
- 亀井伸孝 (2010)『森の小さな〈ハンター〉たち－狩猟採集民の子どもの民族誌』京都大学学術出版会
- ホイジンハ・ヨハン (1973)『ホモ・ルーデンス』中公文庫
- 山内昶 (1992)『経済人類学の対位法』世界書院

¹ 「遊び」の定義については、ホイジンハ (1973 = 原著 1938 年) の『ホモ・ルーデンス』やカイヨワ (1970 年 = 原著 1958 年) の『遊びと人間』が古典として知られている。たとえば、カイヨワでは、遊びの例としてスポーツや賭け事などが扱っているが、それは西洋社会が前提となった「遊び」であるといえ、本稿で取り上げるような自然資源に依存する生活における生業のなかに見出される「遊び」は議論の対象に入っていない。

² たとえば、経済人類学の議論を整理したものとして、山内 (1992) が詳しい。

³ たとえば、私は食事調査や収穫量の調査を行っている。詳しくは Ohashi et al. (2011) を参照されたい。

⁴ 焼畑や伐採活動に参加すると、すぐに服に染みが付いたり破れたりする。特に未熟のバナナ (緑色) の液は、時間が経った後の血痕のような色なり、洗濯しても落ちない。

⁵ 1990 年代までは、12・13 歳で婚姻関係を結ぶこともあったが、近年はまだ学校教育を受けている年齢である。結婚する年齢も当時より高くなっている。

⁶ 船で釣りに出るときもある。その場合、カヌーは小さい方が魚の多くいる木々の間にも入っていきやすいので、好まれる。